

# 吉野作造って どんな人？

**Q** こんにちは。私はじゅん。中学校の2年生です。きのう古川に転校して来ました。夕方ちかく、家の近くを散歩していたら、荒雄公園というところに来ました。建物がある。吉野作造記念館だつて。入り口はどこかな？あつ、ここね。100円だつて。ちよつとはいつてみよう。映画をやつてるんだ。みてみよう。

**A** ビデオの上映がはじまる。吉野作造の小学校時代のシーン……いつの間にか眠くなる。するととなり

**A** ああ、なつかしいなあ。いちょうの木はいまもあつかなあ。ところで、きみは古川のひと？

**Q** なに、この人？わたしはここに越して来たばかりよ。でも、ビデオの写真によく似ているひとね。  
**A** そうか。ついなつかしくてね。古川は、街道沿いの宿場町として昔から栄えていた。そして、肥沃な土地と水を利用して米作りがおこなわれてきたんだ。  
**Q** ふうん。あなたはどうしてそ

んな着物をきているの？

**A** 昔はみんなこんな格好好き。学校もいまみたいにカリキュラムでがんじがらめではなかった。

小学校の初めの頃なんか、近所のおじさんが、仕事の合間にやってくる字の書き方なんかを教えてくれたものだよ。ちゃんとした先生なんかいないんだ。席もお姉ちゃんの隣でね。

**Q** そんなんじやテストで悪い点になるわよ。

**A** そうでもないさ。ぼくの成績は小・中学校通して一番だった。もつとも父母がめずらしく教育熱心だったこともあるけど。

**Q** わたしなんか転校したばかりなのに、ママつたらすぐ塾探し。やんなつちゃうわ。

**A** ぼくの時代の親たちは、学校に行くほど無駄なことはないという考えの人が多かった。学校行くより家の仕事の方が大事だつてね。でも僕の父はちよつとちがつていた。うちの家業は綿屋だったんだけど、父は政治に興味があつてね、よく家を留守

にしてあつちこつち飛び回つて

いたものだ。新聞の取り次ぎもやつてたから、もともと政治や新しい情報に興味があつたんだ

ろう。それでよくにはよく学校の復習をさせた。綿屋を継ぐのは一番上のしめ姉さんに決まっていたもんだから、ぼくには勉強させて医者になせようとしたらしい。

**Q** お父さんのいうことに反発を感じることはなかったの？

**A** うん。当時新聞なんてとてもめずらしかつたから、早く読んでみたくてね。それに父だけじゃなく、小学校の先生で雑誌好きの青年がいてね、その先生のうちに毎日のように遊びにいって本をみせてもらつていた。活

字にすごく興味があつたんだね。  
**Q** ふうん。活字なんて本屋に行けばいいんじゃない。

**A** そのころは本屋はまだ商売にならなかつた。ぼくにとつては本を読むことが唯一の楽しみだった。

**Q** それで近所の人から何ていわ

れたの？

**A** 近所の親たちは「吉野屋の作さんのように」を口癖にして子供を教育していた。中学校に入ると決まつたときは、古川では初めての事件だつて大騒ぎされた。みんなで旗を振つて、仙台に出る僕と父を見送つてくれた。

**Q** 中学にはいるくらいで？

**A** 当時中学校は県内にひとつしかなく、試験に合格しないと入れないんだ。それに仙台は今とくらべると途方もなく遠かつた。小牛田までは歩くしかなかつた。そこから開通したばかりの汽車で仙台までいった。汽車のなかでは景色もみずに眠りこけてしまつて、こんな風で

大丈夫かと父が心配したそうだよ。中学にはいると仙台に下宿することになった。当時の学制

では小学校は8年だったから14歳のときだ。

**Q** それじゃあ、わたしと同じ年ね。それで下宿なんて、さびしくない？

**A** うん。そりゃあ寂しかった。だから仲間をつくつて同人誌をはじめたり、友人をつくつた。でも大好きだったしめ姉さんが病気で急死してしまつたときなんて、つらくてね。月をみると、

姉さんのことが思い出されて、そんなときはとても寂しかったな。でもこのことを作文に書いて、中3の時「学生筆戦場」に応募したら一等賞をもらった。

**Q** 作文が得意だつたのね。この中学校、今でもあるの？

**A** いや、いまは仙台第一高等学校といつて。僕の時代の校長先生は大槻文彦（おおつきふみひこ）といつて、国語学者の



高校生のころの吉野作造（右側）